

〔平成 23 年度博士論文要旨〕

韓国語の先語末語尾 ‘-ㄹ-’ の意味と機能

—語用論的観点からの考察—

言語教育研究科 日本語教育学専攻 博士後期課程 李憲卿

内容の要旨

1. はじめに

本研究は、韓国語の先語末語尾の ‘-ㄹ-’ の意味と機能について考察し、ポライトネス機能と効果について記述した。

‘-ㄹ-’ の意味、機能、効果に対する研究では、推量と意志の他に確実な事柄に ‘-ㄹ-’ が用いられる用法(本研究では第 3 の用法と呼ぶ)の存在を指摘し、その用法における ‘-ㄹ-’ の基本義による効果について言及している。その効果は、婉曲、謙遜、恭遜のような控えめな効果を果たすとされている。確かに、確実な事柄に ‘-ㄹ-’ を用いて、不確実なことのように表現することは、事柄を間接化し、断言や直接的な表現を避けることにより控えめな態度を表すようになる。しかし、先行研究では、第 3 の用法の定義と、控えめな態度を取る動機や文脈については詳しく論じられていないか、不十分であるため、第 3 の用法の定義や効果の性格付けが混乱している。一方、推量と意志が用いられる条件を探るため、推量と意志の意味を持つ ‘-(으)ㄴ것이-’ と比較をしている先行研究もあるが、研究によって主張の観点が異なっており、その基準が定まっていない。

以上の先行研究を踏まえて、本研究では、‘-ㄹ-’ の推量、意志、第 3 の用法に一貫する基本義と機能を再考察した。そして第 3 の用法のポライトネス効果に注目し、ポライトネス用法を定義し、‘-ㄹ-’ の意味・機能とポライトネス効果の関係について考察した。

2. 構成の内容

本研究の構成と各章の概要は次のようである。

第2章では、推量、意志、第3の用法に関するそれぞれの先行研究の概観と考察を行い、先行研究の考察で得られた問題点から本研究の方向を決めた。

1) 推量における‘-ㄹ-’と‘(으)ㄴ것이’の比較の研究を概観し先行研究で立てられている基準を見直し、両者は、思考の過程を経ないか経るかという命題に対する捉え方の違いであることを提起した。2) 意志における‘-ㄹ-’と‘(으)ㄴ것이’の比較の研究を概観し、先行研究が立てている丁重さ、強さという基準を見直し、意志の形成の状況に注目すべきであることを提起した。3) 先行研究であげられている第3の用法を検討し、聞き手の決定権の侵害を緩和し、聞き手との関係を調節する用法とそうでない用法とに分けることを試みて、第3の用法の基準と用法を提起した。

第3章では、第2章の先行研究の考察を通して提起している思考過程を経るか経ないという観点で、推量における‘-ㄹ-’のモダリティ的意味と機能を取り出した。‘-ㄹ-’を用いた推量の根拠は、会話の場で与えられるもの、既知のことから会話の場で思いついたもの、会話の場で生じる背後の論理である。そして、推量は、それらの根拠を通して、直感的・瞬間的・現場的に行われ、必然的な事実に導かれ、思考過程を経ない判断であることが明らかになった。このような性質は、話し手が命題に対して所有権を放棄し、事態から距離をとるようになることが分かった。

第4章は、第2章の先行研究の考察を通して提起している意志が形成される状況に焦点を当てて、‘-ㄹ-’のモダリティ的意味と機能を取り出した。‘-ㄹ-’が用いられる意志の形成は、会話の場の状況により形成されることが分かった。話し手の意志が述べられる平叙文での意志の形成と実行は、聞き手と深く関わっており、その関わりは、許可・同意・受諾など聞き手の反応を誘導する、宣言、約束、申し出・誓いといった遂行的な発話行為として表れることが分かった。一方、聞き手の意志を尋ねる疑問文でも、聞き手の許可・同意・受諾などを求める、勧め・勧誘・依頼の発話行為として表れることを明らかにした。このように意志用法においても、瞬間的・現場的・必然的な意味と、事柄から距離をとる機能があり、推量と意志における‘-ㄹ-’の意味と機能は一貫している。

第5章では、第2章の先行研究の考察を通して見直した第3の用法を定義し、ポライトネス的機能と効果について述べた。確実に確認できている事柄に‘-ㄹ-’が用い

られるポライトネス用法とは、1) 聞き手として断る余地がない命令となる表現、2) 聞き手として断る余地がない依頼となる表現、3) 聞き手の説明や命令に対する答え：話し手としては既に理解・了解したこと、4) 聞き手と話し手が共有する事実(挨拶)、5) 聞き手として選択の余地のない予告 6) 聞き手として選択の余地のない確実な事実を伝えることなど、聞き手の決定権を侵害する負荷度の高い発話であると定義できた。ポライトネス用法の目的は、上のような聞き手のネガティブ・フェイスの侵害の恐れが高い発話によって、距離が大きく離れている聞き手のネガティブ・フェイスの侵害を避けるためであり、第3の用法のネガティブ・フェイスを保つ方法とは、‘-ㄷ-’を用い、事柄を会話の状況によって生じる事態として間接化し、聞き手に判断を委ねて同意や許可を求めるようにし、発話に対する拘束力を弱めることである。

第6章では、第2章～第5章で考察した、推量、意志、ポライトネス用法に関する議論をまとめ、‘-ㄷ-’の基本義を取り出し、基本義と語用論的關係を考察した。本研究では、推量、意志、ポライトネス用法に共通する基本義は、「現場的必然判断」であると導き出された。「現場的」とあるということは、会話の場の状況に基づき、思考過程を経ない瞬間的であると言い換えることができ、そこには聞き手が存在する。「必然」ということは、事柄が導かれる事柄に選択の余地がないという意味であり、このような基本義によって、事柄から距離を取る機能が生じる。ポライトネスは語や表現の意味そのものではなく、文脈や人間関係との相関によって生じる含みとしての発話効果である(滝浦 2008 : 083-084)という観点から、‘-ㄷ-’の「現場的必然判断」の意味と話し手が事柄から距離を取る機能は、文脈や聞き手によって異なる発話効果を生じさせるという基本義と語用論的效果の關係についても考察を行っている。推量の場合、聞き手との距離が小さく、敬意ゼロの場合は、聞き手に対する距離と‘-ㄷ-’の距離化が合わなく、感嘆・驚きのような緊迫な状況を表わすようになり、聞き手との距離をとり、敬意のある対者敬語の場合、聞き手に同意するか、聞き手に同意や確認を求める効果が表れた。意志の場合、聞き手との距離が短いと聞き手に利益がもたらすか、不利益がもたらすかに関係なく緊張感や緊迫感が表れた。聞き手との距離がある場合は、聞き手の反応をうかがうなど、文脈と聞き手によって異なる効果が生じた。

本研究では、‘-ㄷ-’の事態を捉える態度と効果について考察し、本研究の考察を通して、‘-ㄷ-’は、事態に対する捉え方は会話場での瞬間的な判断であることが分か

り、このような定義によって、会話の場と離れて思考の過程を経る ‘-(으)ㄴ것이’ との区別の基準を立てるようになった。そして、‘- ㄴ-’ の基本義は文脈や聞き手との関係によって語用論的効果が生じることが分かり、ポライトネス効果は、上向き相手に対する聞き手のネガティブ・フェイスを保つための語用論的効果であることが分かった。本研究のこのような考察によって、混乱していた ‘- ㄴ-’ の事態に対する態度、基本義、第3の用法の定義が整理できたといえる。